

福岡市博多区

南八幡遺跡群

第8次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第602集

1999

福岡市教育委員会

福岡市博多区

南八幡遺跡群

第8次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第602集



平成11年

福岡市教育委員会

序

アジアの拠点都市として古くから国際都市として発展してきた福岡市では、21世紀に向けてさらに飛躍を遂げようと、市内各地で都市開発が押し進められています。

それにともなってやむなく埋蔵文化財が失われる場合は、将来にわたって記録を保存するための発掘調査を行っています。

本書は、福岡市博多区元町で共同住宅の建設に先立つて実施した南八幡遺跡群第8次調査の報告書です。

南八幡遺跡群の周辺は、奴国の中心域と推定され、これまでの発掘調査の成果で奈良時代の集落が営まれていたことが明らかになっています。

今回も奈良時代の遺構、遺物が発見され、集落の広がりや性格を考える上で重要な成果を得ることが出来ました。

発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、城戸武昭氏をはじめ多くの方々にご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊



凡 例

- 本書は、福岡市博多区元町1丁目3-14の共同住宅建設工事に先立って実施した南八幡遺跡群の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、平成9年4月10日から4月28日まで行った。南八幡遺跡群では第8次調査に当たる。
- 検出した各遺構は、発掘作業では次のような略号をつけていたが、本書では遺構名と併記してSD-01土壤、SE-01井戸のように表している。

ピット、柱穴	SP
土壤	SD
井戸	SE
その他	SX
搅乱土壤	SK
掘立柱建物	SB

- 本書で掲載した遺構、遺物の実測図と撮影は、発掘担当者の力武が行った。
- 遺物は種類別に次の頭文字をつけ、通し番号とした。種類が分かるように断面の表示を次のように区別している。なお、図、写真（拡大写真は別）ともに縮尺を1/3に統一している。

種 類	略 号	表 示
須恵器	S	黒ベタ
須恵器質	SU	細密網
土師器	H	白又キ
瓦 類	K	粗い網
石 器	T	斜 線

- 今回の発掘調査による出土遺物と実測図、写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（博多区井相田2-1-94 ☎092-571-2921）に、収蔵、保管されるので活用をお願いする。
- 本書の編集、執筆は力武が行ったが、図面トレースは北村幸子、羽方誠さん二人の協力を得た。

目 次

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 周辺の遺跡とこれまでの調査	2
発掘調査一覧表	7



第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過	8
試掘調査 本調査	8
2. 遺構と遺物	
SE-01 井戸	12
遺物 須恵器	14
土師器 瓦類	16
石器	17
SB-01 掘立柱建物	18
SD-01 土壙	19
遺物 須恵器 土師器	19
SD-02 土壙	20
遺物 須恵器	22
須恵器質	23
土師器	24
瓦類 石器	26
ピット出土の遺物	28
遺物法量と登録番号対照表	29



第3章 小 結

..... 30



挿図目次

1. 発掘区と周辺の町並み	IV
2. 周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	3
3. 昭和初期の地形図（縮尺1/10,000）	4
4. 発掘調査地点（縮尺1/10,000）	5
5. 南八幡2、3、6、8、9次調査地点 （縮尺1/1,000）	6
6. 発掘作業のようす I 区	8
7. ローム面の掘り下げ	9
8. II区の調査	9
9. 埋め戻し作業	9
10. 完成したビル	10
11. グリッド設定図	10
12. ビル平面図	10
13. 遺構平面図（縮尺1/60）	11
14. SE-01 井戸実測図（縮尺1/40）	12
15. 掘り下げ作業	12
16. 井戸の土層	13
17. 土層と湧水	13
18. 遺物実測図（縮尺1/3）	14
19. 須恵器 円面鏡	15
20. 離内面のケズリ (H-01)	16
21. 遺物実測図（縮尺1/3）	16
22. 土師器、瓦類、石器	17
23. SB-01 掘立柱建物跡実測図 （縮尺1/40）	18
24. 掘立柱建物跡	18
25. SD-01 土壌実測図（縮尺1/40）	19
26. 遺物実測図（縮尺1/3）	19
27. III区の遺構	19
28. SD-02 土壌実測図（縮尺1/40）	20
29. 遺物の出土状況	20
30. I 区の遺構	21
31. SD-02 土壌 南東より	21
32. 遺物実測図（縮尺1/3）	22
33. 遺物実測図（縮尺1/3）	23
34. 須恵器質 (Su-08)	23
35. 遺物実測図（縮尺1/3）	23
36. 土師器 (H-1 6)	24
37. 遺物実測図（縮尺1/3）	24
38. 遺物実測図（縮尺1/3）	25
39. 瓦	26
40. 遺物実測図（縮尺1/3）	27
41. 遺物実測図（縮尺1/3）	28
42. 完成したビル	30



1. 発掘区と周辺の町並み

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

平成9年（1997）3月、城戸武昭氏より、福岡市博多区元町1丁目3番地14号にある家屋の建て替えに伴い、埋蔵文化財の有無について事前の確認調査願いが出された。

申請地は、「福岡市文化財分布地図」（東部Ⅰ 雜餉隈13/14）に「南八幡遺跡群」として登録掲載されている周知の文化財包蔵地に入っている。この遺跡群では、後述するようにすでに7次の発掘調査が行われ、道路（県道南福岡停車場線）を挟んだ北側に位置する駐輪場と寿町公園の発掘調査では、古墳時代から奈良時代にかけての堅穴住居跡や掘立柱建物跡などで構成される集落が検出されており、その集落が南側の申請地まで広がっていると予想された。

このため、家屋解体後に試掘調査を行うこと

にした。

4月2日に行った試掘調査の結果、遺跡の残りはよく、開発面積256.44m²全面に及んでいると判断されることから、本調査によって記録保存を図る必要があることを連絡した。

城戸氏によると、5階建ての共同住宅ビルであるが、最上階を専用住宅として使用することもあって、早急に建設工事にかかりたいという要望であった。

協議の結果、城戸氏の理解と協力を得ることができ、また埋蔵文化財課も年度初めの業務計画の調整を済ませ、下記のような調査体制で4月10日から15日間の予定で本調査を実施することになった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

総括 埋蔵文化財課

課長 荒巻伸勝

係長 山口譲治

庶務 小森彰 河野淳美

事前審査 係長 松村道博

池田祐司 屋山洋

発掘調査 力武卓治

調査作業 安高精一 長野嘉一 蒲池雅徳

内山和子 亀井薰 安高久子

整理作業 生垣綾子 安部国恵 清水啓子

山野祥子 池田由美 宮崎まり子

図面整理 北村幸子 羽方誠

地名	南八幡遺跡群	第8次調査	所在地	福岡市博多区元町1丁目3～14
調査番号	9707	遺跡略号	MHM-3	開発面積 256.44m ²
調査対象面積	246.5 m ²	調査面積	114 m ²	調査期日 1997.4.10～4.28

3. 周辺の遺跡とこれまでの調査

南八幡遺跡群は、福岡市のもつとも南に位置し、大野城市、春日市に接している。この一帯は烏栖ロームを基盤としており、その間に北流する諸岡川など小河川の解析によって、小さな低台地がいくつも形成され、平野部に浮き出た独立丘陵の観をなしている。古くから生活の場として利用され、それぞれに遺跡が発掘調査されている。さらに東の御笠川や西の那珂川による冲積地も広がり、板付遺跡や雀居遺跡など弥生時代開始期の遺跡が点在している。

さらにJR南福岡駅の南西約2kmの春日丘陵には、30年前後の中国製青銅鏡などを副葬していた須玖岡本遺跡が控えている。また博多湾に向かって連なる那珂、比忠丘陵には、青銅器やガラスなどの製作を示す鋳型も集中的に出土し、奴國の経済的基盤を誇示している。

このように「弥生銀座」の名にふさわしく弥生時代遺跡が集中する地域であるが、最近の発掘調査では、これまで発見例のなかつた先土器時代の石器類、縄文時代の落とし穴、奈良時代の大型掘立柱建物跡などが確認されている。遺跡の内容については各報告書に詳述されているので、ここでは繰り返さないが、この地域の歴史的変遷がさらに具体的に物語れるようになりつつある。

ところで南八幡遺跡群周辺の地形は、昭和初期の地図によると、北西に向かって八つ手状にのびる低い丘陵となっており、その谷部には用

水池が築かれていたようである。今は埋め立てられて商業、住宅地となっているために、当時の地形を想像することはとてもできないが、この丘陵に点在する遺跡を地形的に区別して、西から南八幡遺跡群、麦野B遺跡群、麦野A遺跡群、麦野C遺跡群と呼んでいる。

この地の都市化は、明治22年(1889)に九州鉄道稚飼駅(ざしきのくまき 現在のJR九州南福岡駅)が開設されたことから始まる。大正13年(1924)には、すぐ近くに西日本鉄道稚飼限駅も開設され、交通の要衝として栄えてきた。近くには鉄工所も進出し、福岡市南部における中心的な役割を果たしてきた。さらに戦後は米軍キャンプや自衛隊駐屯地も置かれ、二つの駅をつなぐ商店街は活況を呈し、住宅地も拡大した。それでも昭和30年代までは、周辺には田園風景が広がり、鉄道沿線独特的な雰囲気があった。

福岡市民は、稚飼隈を親しみを込めて「ざつしょ」と呼ぶが、地名の由来は、太宰府官人の稚掌が住む場所だったとか、食糧倉庫が建ち並んでいたとかの説がある。年末12月10日から行われる十日恵比寿祭りは、「街おこし、地域づくり」の目的で明治35年から新しく始まったものである。今までこそ農具や衣料などの露店は見られないが、両駅を結ぶ通りには食べ物や玩具の夜店が並び、多くの信者や見物客を集め賑やかである。

昭和40年代後半になると、副都心としての機

※『福岡県百科事典』西日本新聞社 第57

遺 跡 名

1. 久保園遺跡
2. 席田大谷・赤穂ノ浦遺跡
3. 宝満屋遺跡
4. 雀居遺跡
5. 天神森遺跡
6. 下月隈A遺跡
7. 下月隈B遺跡
8. 下月隈C遺跡
9. 上月隈遺跡
10. 立花苔B遺跡
11. 立花寺遺跡
12. 金隈遺跡
13. 金隈上屋敷遺跡
14. 比忠遺跡群
15. 那珂遺跡群
16. 板付遺跡
17. 高畠遺跡
18. 諸岡B遺跡
19. 諸岡A遺跡
20. 井尻B遺跡
21. 笹原遺跡
22. 三筑遺跡
23. 麦野A遺跡群
24. 麦野B遺跡群
25. 麦野C遺跡群
26. 南八幡遺跡群
27. 仲島遺跡
28. 井相田A遺跡
29. 井相田C遺跡
30. 井相田B遺跡
31. 稚飼隈遺跡群
32. 須玖遺跡群
33. 岡本遺跡群



2. 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)



3. 昭和初期の地形図（縮尺1/10,000）

能がさらに高められ、マンション建設、公共施設など都市開発が一気に進んだ。それに伴つて遺跡の調査件数も急増し、平成10年までに発掘調査一覧表のように33例を数えている。

奴国を中心と推定される地だけに、発掘調査に対する期待は大きい。しかし、調査件数に反比例して、遺跡が確実に消滅していることも事実である。私たち理藏文化財業務を担当する者にとって、開発側との調整を進め、遺跡の保存を図ることは、歴史の解明と同じように重要な責務であろう。

南八幡遺跡群

1. 1次 2. 2次 3. 3次 4. 4次 5. 5次
6. 6次 7. 7次 8. 8次 9. 9次

雑前隈遺跡群

10. 1次 11. 2次 12. 3次 13. 4次 14. 5次
15. 6次 16. 7次 17. 8次 18. 9次 19. 10次

麦野A遺跡群

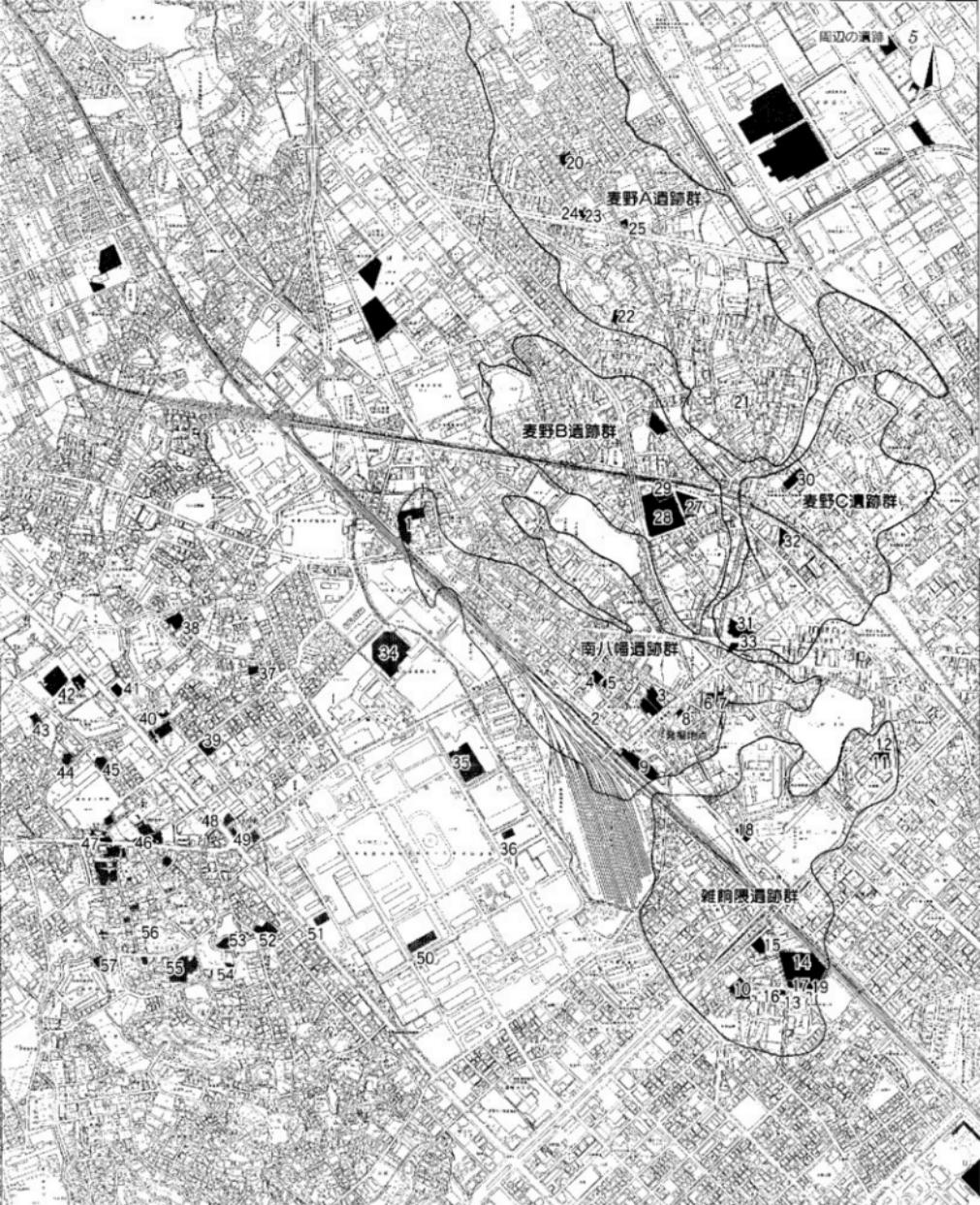
20. 1次 21. 2次 22. 3次 23. 4次 24. 5次
25. 6次

麦野B遺跡群

26. 1次 27. 2次 28. 3次 29. 4次

麦野C遺跡群

30. 1次 31. 2次 32. 3次 33. 4次



春日の遺跡 34. 下大室遺跡 2次 35. 下人荒遺跡 1次 36. 大荒遺跡 37. 須玖黒田遺跡 38. 須玖前町遺跡 39. 須玖水町遺跡

40. 須玖水町遺跡 A 地点 41. 須玖土反田遺跡 2次 42. 須玖朝梨遺跡 43. 習者ヶ本遺跡 44. 須玖正反田遺跡 1次
 45. 須玖水町遺跡 B 地点 46. 須玖板本遺跡 47. 須玖岡本遺跡 48. エノコ遺跡 49. 須玖尾花町遺跡 50. 天田遺跡 51. 上平田遺跡
 52. 岡本野添遺跡 53. 嶋芳遺跡 54. 上敷田遺跡 55. 岡本遺跡 56. 岡本山遺跡 57. 岡本ノ上遺跡

奥谷日山の墓について、春日市若狭委員会の古川千智子さんより資料の提供を受けた。

4. 発掘調査地点 (縮尺1/10,000) 0

500m

日本製紙新潟二本松工場



5. 南八幡2、3、6、8、9次調査地点 (縮尺1/1,000)

0 50m

発掘調査一覧表

地区番号	遺跡名	次数	所在地	発掘面積 m ²	調査番号	発掘担当者	報告書 号数	遺跡の概要 時代 主な遺構
1	南八幡遺跡群	1	南八幡2-8-5	680	7937	柳沢・横山	489	古墳 - 溝4
2	南八幡遺跡群	2	寿町2-119-1	800	8413	力武・大庭	128	古墳 - 壁穴住居4 上塙1
3	南八幡遺跡群	3	寿町2-4-12	930	8652	田中・荒牧	181	奈良 - 壁穴住居4 挖立柱建物4
4	南八幡遺跡群	4	寿町2-86-1,2	247	9112	大庭	277	奈良 - 壁穴住居3 挖立柱建物13
5	南八幡遺跡群	5	寿町2-84-85-1	56	9452	白井	441	弥生 - 壁穴住居1 土塙
6	南八幡遺跡群	6	元町1-19-4	206	9508	加藤・佐藤	501	鐘文 - 土塙3
7	南八幡遺跡群	7	元町1-20-2	181	9560	宮井	528	奈良 - 壁穴住居3 上塙1
8	南八幡遺跡群	8	元町1-3-14	114	9707	力武	602	奈良 - 挖立柱建物1 井戸1
9	南八幡遺跡群	9	寿町2-9-30	1,752	9814	小林		弥生 - 壁穴住居8 挖立柱建物11 古墳 - 壁穴住居4 井戸1 奈良 - 壁穴住居4
10	雜船限遺跡群	1	新和町2-10-26	300	9024	荒牧	276	奈良 - 土塙2 柱穴
11	雜船限遺跡群	2	西春町1-17-27	345	9324	山崎・山口	409	奈良 - 壁穴住居6 挖立柱建物3
12	雜船限遺跡群	3	西春町1-18	156	9349	音波・山口	409	奈良 - 壁穴住居4
13	雜船限遺跡群	4	新和町2-13	105	9367	音波・山口	409	奈良 - 挖立柱建物2 上塙1
14	雜船限遺跡群	5	新和町1-2 ~6	4,785	9407	宮井	569	弥生 - 壁穴住居6 貯藏穴8 奈良 - 壁穴住居51 井戸2
15	雜船限遺跡群	6	新和町2-1-35	481	9431	宮井	528	奈良 - 土塙 挖立柱建物2
16	雜船限遺跡群	7	新和町2-14-1	54	9523	大庭	569	奈良 - 上塙2 溝2 柱穴42
17	雜船限遺跡群	8	新和町1-7	395	9550	宮井	569	奈良 - 壁穴住居5 上塙3 溝2
18	雜船限遺跡群	9	西春町3-1	733	9648	加藤	570	奈良 - 大型挖立柱建物2 壁穴住居2 上塙27
19	雜船限遺跡群	10	新和町1-7	337	9670	宮井	569	奈良 - 壁穴住居1 挖立柱建物1 上塙8
20	麦野A遺跡群	1	麦野1-28-56	600	8232	力武・大庭	107	中世 - 井戸2 挖立柱建物
21	麦野A遺跡群	2	麦野5	80	8337	山崎・田中		奈良 - 壁穴住居1 井戸
22	麦野A遺跡群	3	麦野4-14-23	247	9116	大庭	275	奈良 - 壁穴住居14 上塙 中世 - 挖立柱建物4
23	麦野A遺跡群	4	麦野1-27-3,5	134	9316	音波・山口	409	中世 - 井戸1 近世 - 井戸1
24	麦野B遺跡群	5	麦野1-27-1,2	6	9412	佐藤		奈良 - 井戸1 土塙1
25	麦野B遺跡群	6	麦野3-11-29	224	9824	山上		奈良 - 壁穴住居1 井戸1 中世 - 溝2 土塙1
26	麦野B遺跡群	1	麦野4-26-32	850	8520	松村	164	奈良 - 井戸1 中世 - 井戸1
27	麦野B遺跡群	2	麦野31-1,2	1,368	9257	佐藤	358	奈良 - 壁穴住居5 挖立柱建物6
28	麦野B遺跡群	3	麦野2-3	4,068	9613	木曾・加藤	568	奈良 - 壁穴住居5 挖立柱建物
29	麦野C遺跡群	4	麦野2	269	9661	加藤	568	奈良 - 壁穴住居1 溝1
30	麦野C遺跡群	1	麦野6-11-4	633	8949	小畠	361	奈良 - 壁穴住居23 土塙3
31	麦野C遺跡群	2	銀天町2-4	100	8904	佐藤		奈良 - 壁穴住居1
32	麦野C遺跡群	3	銀天町3-14	242	9604	宮井	501	奈良 - 壁穴住居2 上塙2 溝
33	麦野C遺跡群	4	銀天町2-3-6	265	9628	加藤		奈良 - 壁穴住居3

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過 試掘調査

平成9年4月2日に実施した試掘調査では、申請地の中央に南北に長さ約7m×幅約80cmのトレーナーを設定し、土層の観察と遺構検出が行われた。

その所見によると、地表より深さ約70cmまで家屋解体時の廃材や砂利などの搅乱土で、その下に黒褐色土層が薄く堆積し、約1mで地山と思われる茶褐色土層に達している。

この地山は、鳥栖ロームと呼ばれる土層で、トレーナーの南北端で約35cmの差があり、北のJR南福岡駅に通じる道路に向かって緩やかに傾斜している。

道路を挟んで対峙する2次と3次の調査区における地山は、逆に南側の道路に向かって約1度で傾斜しており、南端になるほど急である。凹地を埋めて道路建設をしたという地元の方々の話に一致している。

遺構と思われるのは、試掘トレーナーの南半部で検出した黒褐色土の落ち込みで、弥生土器の破片を含んでいることから弥生時代の竪穴住居跡の可能性が予想された。北半部には、円形ピットが数個点在し、また古墳、奈良時代の遺物も採集できることから、2次、3次調査で完全に究明できなかつた古墳時代～奈良時代集落の構造、範囲、性格などだけでなく、周辺一帯の歴史的変遷の解明に一步近づけるのではないかと期待された。

本調査

以上のような課題を本調査の目的とし、細かな計画を立てて着手することにした。

ところが調査対象地は民家、ビルの間に位置していることから、隣地境界線から2m弱の引

きを取らざるをえず、また北側の道路は、夜間も車両、人通りが途絶えず、外柵や危険表示など十分な安全対策を施す必要から、発掘面積は調査対象地の約50%にとどまった。

しかも、廃土の持ち出しも置き場もなく、隣地の水道管も中央に残っていることから、3区に小区分して、遺構検出、実測、撮影と廃土移動を数度繰り返した。このため全体撮影ができず、また遺構の配置や把握などのもっとも重要な検討作業を、発掘終了後の合成図面で行う結果となった。また廃土移動に伴う重機の搬入、搬出は、昼間の混雑を避けて早朝に行い、昼間の通行人の安全を確保するために、外柵を巡らせるなど十分な安全対策を講じた。

調査の結果、試掘調査で推測した弥生時代の竪穴住居跡は確認できなかつたが、素掘り土壙、石積み土壙、掘立柱建物跡、井戸、ピットなど各種の遺構を検出した。これらから出土した遺物の総量は、コンテナに9箱である。

発掘作業上の支障や問題は多かつたが、調査期間中、城戸氏の丁寧な対応、協力もあって、順調に消化し、予定期日よりも早めに発掘工程を終え、埋め戻しをすることができた。



6. 発掘作業のようす I区



7. ローム面の掘り下げ



8. Ⅱ区の調査



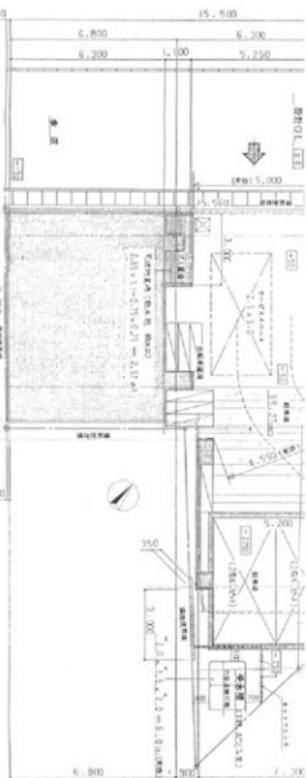
9. 埋め戻し作業



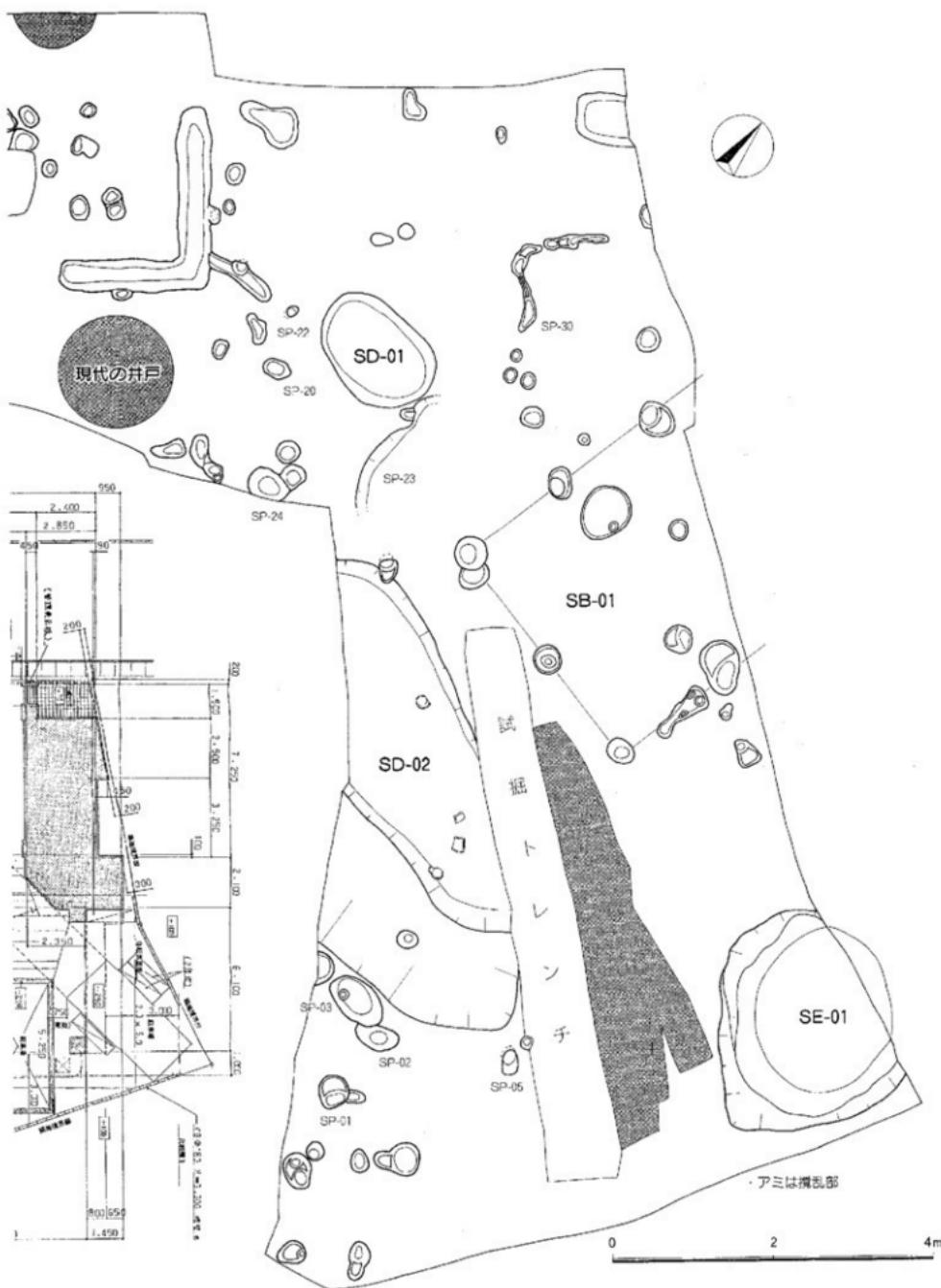
10. 完成したビル



11. グリッド設定図



12. ビル平面図



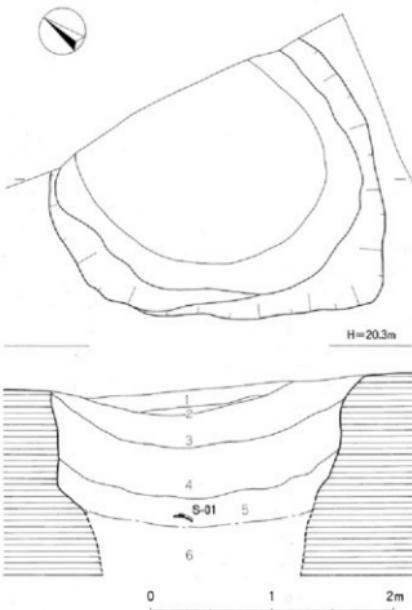
2. 遺構と遺物

ここでは、奈良時代に属する井戸、掘立柱建物跡、土壙、ピットと、その出土遺物について記す。この他に石積み土壙や井戸などがあるが、コンクリート片やビニールなどが混じり、現代の遺構と判断されることから、報告を省略している。なお、城戸氏によると昭和前半は鉢湯だったとかで、井戸や石炭ガラなどはその痕跡である。

SE-01井戸

発掘区の南東隅で検出した。東側の一部が発掘区外に出ているが、ほぼ全形を知ることができる。上面は長径 258cm、短径 235cm でわずかに南北方向に長い梢円形をしている。地山の鳥栖ロームを掘り込んだ壁は、垂直ではなくわずかに出入りがある。深さ 1m あたりから長径 200 cm、短径 220 cm と狭まり、壁もやや傾斜しているようである。

14. SE-01 井戸実測図 (縮尺1/40) ▶



15. 掘り下げる作業



16. 井戸の土層



1. 茶褐色土
2. 茶褐色土
3. 淡茶褐色土
4. 茶褐色土
5. 淡茶褐色土

17. 土層と湧水

深さ130cmで水が湧き出し、隣地の堀が倒壊する恐れもあることから、掘り下げを断念した。埋土は図のように茶褐色土で5層に分けることが出来る。土層はレンズ状に堆積しており、完全に堆積するには、ある程度の時間が経過したのであろう。

遺物は各土層から出土するが、上下で数量や時期に極端な差は認められない。

この一帯は、鳥栖ロームの下層に八女粘土層があり、その土層境から湧水する。このため井戸を掘削する場合、一定の水量を確保するには、

八女粘土層まで達する必要があり、遺跡で発掘する井戸は、実際にそのような深さになっていることが多い。また発掘された井戸は、両層の境が長年の湧水で浸食されて抉れており、井戸と判断する根拠ともなっている。

SE-01井戸は、底部まで達して断面を観察しているわけではない。また井筒も確認していないことから、積極的に井戸とすることは出来ないが、土壤にしては湧水量が異様に多かつたことから、ここでは井戸として取り扱った。

遺物

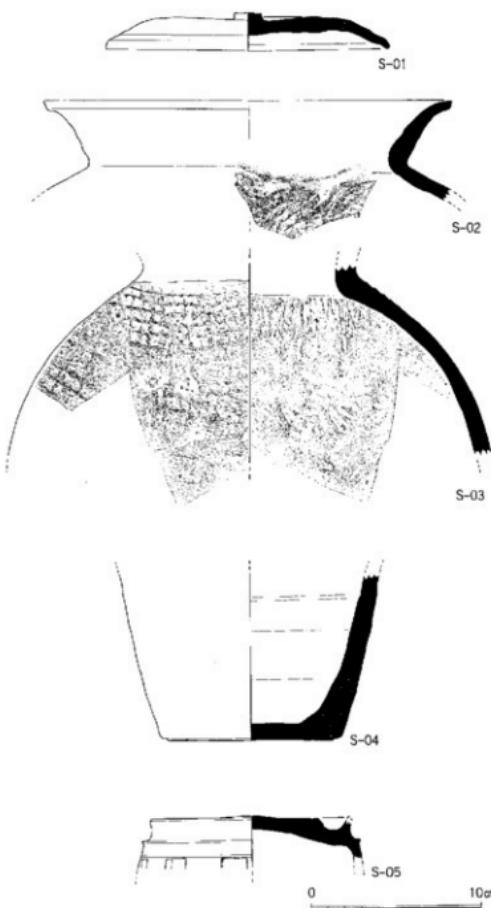
埋土から須恵器、土師器、瓦、石器の遺物が出土し、その破片総数は71点である。このうち須恵器5点（円面鏡を含む）、土師器3点、瓦2点、石器2点の計12点を図示したが、種類ごとの比率を示すものではなく、土師器が多い。

須恵器 S-01は図12の土層断面図に記入しているように5層から出土した。全形の1/2が残る杯蓋で、口径は17cmを測る。胎土には極小の砂粒をわずかに含み、焼成はよく、器面は灰色をしている。天井部はわずかに窪み、その中央に背の低いつまみを張りつけている。体部との屈曲部は緩やかで、明瞭な段はない。端部は、折り曲げず小さく屈曲して立ち、丸みのある断面におさまっている。天井部はナデ、体部は横ナデ調整であるが、内面は凹凸が目立ち、また口縁部も水平でなく、全体的に丁寧なつくりとは言えない。

S-02は井戸埋土の下部より出土したもので、口縁部の破片であるが、体部の一部が残っており形状の特徴や調整法を知ることができる。口縁部は、頸部から直線的に短くのび、端部は上方に微妙に摘み上げている。口径は24.4cm。器面の調整は、口縁部は横ナデ、体部内面は同心円文の叩きで、外面は格子文叩きの後に時計回りの方向にナデを加えている。焼成はよく、内外面とも灰色であるが、頸部外面は黒色となっている。

S-03は甕の体部上半の破片で、口縁部と体部下半がない。頸部はよく縮まり、上半部は球形となっている。丸みのある屈曲部からすると、口縁部へは緩やかに外反するのだろう。器面の調整は内面は同心円文叩きの後にナデを加える。外面の頸部近くには格子文叩きがよく残っている。焼成時に灰を被り、頸部からわずかに自然釉が流れている。胎土に砂粒を含まず、堅く緻密な仕上がりである。

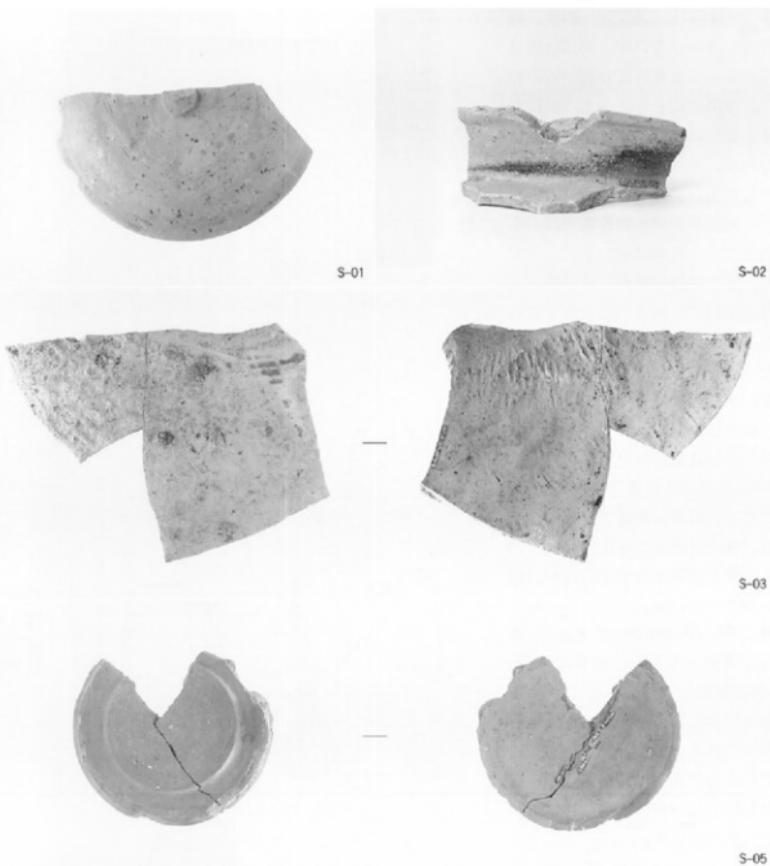
S-04は壺状の器形を推定したが、形状は不明。色調は外面だけが茶色を帯びた濃灰色で、断面と内面は灰色を呈している。高温焼成なのか、



18. 遺物実測図（縮尺1/3）

仕上がりがきわめてよい。底径10.8cm、底部の切り離し方法は明らかでないが、工人の指紋が残っている。

S-05は2片に割れ、さらに台脚部を失っているが、接合で須恵器製の円面鏡であることが分かった。台脚部に長方形の透かしがあることか



19. 須恵器 円面鏡

ら圓足鏡と呼ばれる分類に入る。直径8.0 cmの陸部は、平坦ではなく中央部と周縁端がわずかに盛り上がっている。中心より約6 cmは実際に使用されたのか平滑になっているが、墨痕は残っていない。海部は幅1.7 cm、深さ8 mm、外堤の先端は欠けているが、陸部と同じような高さ

となるのであろう。脚部の透かしは幅13 mmから17 mmと不揃いで、その間隔から12個の透かしを復元できる。透かしの直上に細い沈線が1条巡っている。色調は内外面とも濃灰色で、器壁断面は中心が灰色、外側が茶灰色の層をなしている。南八幡遺跡群では初の発見である。

土器器 H-01は口径25.4cmの甕。底部の形状が分からぬが、体部は張りがなく、そのまま丸底につながるのであろう。頭部の縫まりは弱く、直線的に外反する口縁部がつく。端部断面は丸みがあり、やや肥厚している。口縁部の内面は粗い横ハケ、外面は右下がりのナテの後横ナテ。体部内面は右上がりのケズリ、外面は縦ハケ目、下部はナテ。外面に煤が付着している。

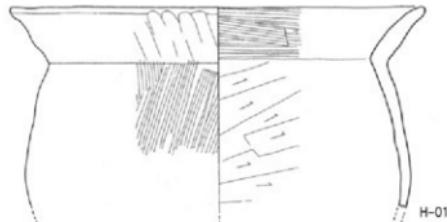
H-02は把手で、甕との接合部で外れている。胎土は精良土ではないか砂粒は少ない。全体を指揮さえで整え、接合部をハケ目で調整している。色調はうすい灰茶色を呈する。大きめの形状から壺と思われるが断定できない。

H-03は高杯の柱状部で、杯部と脚裾部を欠く。柱状部内面はシボリ痕が認められ、外面は緻密な胎土を用いていたためにやや軟質になつてゐるが、縦ナテ痕が残つてゐる。

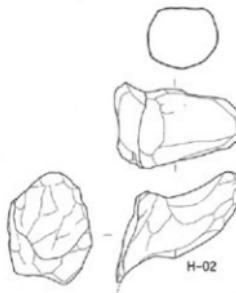
瓦類 K-01は小破片であるが、その湾曲から丸瓦とした。厚さは1.7cmで、一部に側縁が残つてゐることから、図のように復元した。胎土に1mmの大砂粒を多く含み、焼成は不完全である。軟質のために全体が磨耗して成形、調整痕は明瞭でないが、凹面に布目痕がわずかに残つてゐる。



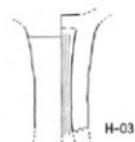
20. 甕内面のケズリ (H-01)



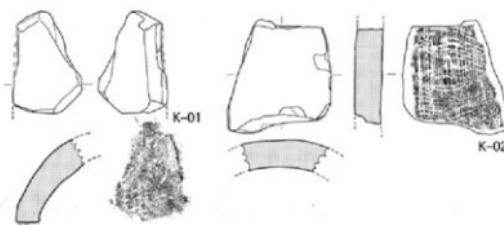
H-01



H-02

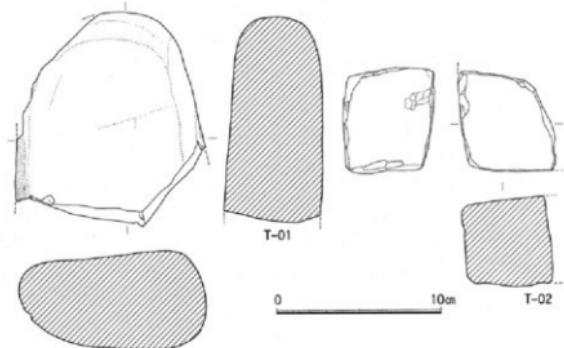


H-03



K-01

K-02



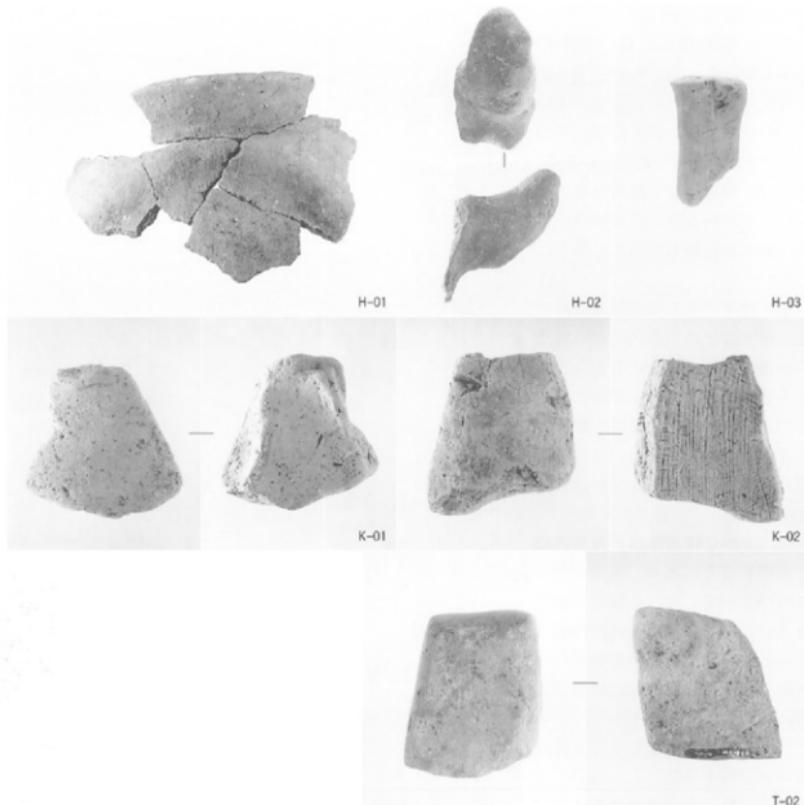
0

10cm

T-01

T-02

21. 遺物実測図 (縮尺1/3)



22. 土師器、瓦類、石器

K-02も同じように細片なので、丸瓦などの部分が不明。色調はうすい灰色で、K-01よりも堅い焼成である。その分、凹面に布目痕が明瞭に残っている。平織りであるが縫糸が整然と並行しているのに対し、縫糸はかなり乱れている。密な部分では1cm当たり、経糸8本、緯糸6本であるが、粗い部分の縫糸は3~4本を数えるに過ぎない。断面の厚さは1.7cmである。

石 器 T-01は砂岩質の川原石を利用した石器である。図の左面と側面が使用で滑らかとなつていて、左面中央が窪んでいることからすると砥石よりも、石皿のような使用法と考えた方が妥当であろう。

T-02は緻密な砂岩で、長方形の隅部だけを残している。割れている面以外は、3面とも研ぎ面として使用されているが、加工時の細かな凹凸が残っており、使い込んではいない。

SB-01 掘立柱建物

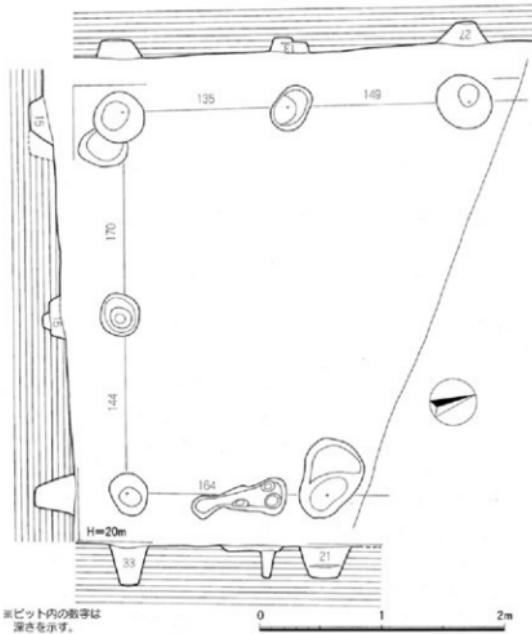
141m²の発掘区には、大小のピットが点在しているが、明らかに現代の擾乱と思われるものを除くと67を数える。埋土には、茶褐色とやや黒みを帯びた2種がある。土師器、須恵器など遺物を出土するピットは18あるが、他の遺跡に比べ数も遺物量もけつして多くない。

南八幡遺跡群や雜飼隈遺跡群では、ほとんどの調査区で掘立柱建物が検出されていることから、今回も時間をかけて確認作業に努めたが、SB-01 掘立柱建物1棟にとどまつた。もちろん他のピットも掘立柱建物の一部をなす可能性は十分ある。

SB-01 掘立柱建物は、発掘区の中央部北寄りにあり、東壁にさらにはのびている。柱穴の掘形や柱間などの大きさ、測定値は図の通りであるが、北列の柱穴が南列に比べ総じて深いのは、地山の傾斜に対応しているのであろう。

2、3次調査区では、計8棟の掘立柱建物を確認しているが、その並びには3方向に分けることができる。今回検出したSB-01 掘立柱建物は、全形ではないので梁、桁の方向を明らかにできないが、3次調査区の5号掘立柱建物に最も近い。

残念ながらどの柱穴からも時期を特定できるような遺物は発見できなかつた。しかし、他のピットの遺物が奈良時代に限られていること、2、3次調査区と著しい違いがないことから、SB-01 掘立柱建物も同じ奈良時代と考えている。



土 壤

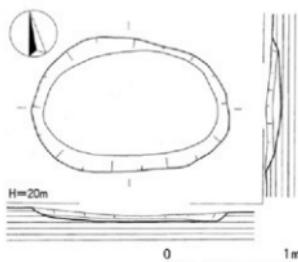
掘立柱建物の柱穴に比べ、直径が1mを超す大きめの長楕円形の落ち込みが2か所あるが、これを土壤として報告する。

SD-01土壤

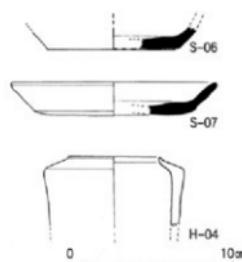
2区、3区の重複部で検出した。平面は長径160cm、短径110cmの楕円形で、深さ13cmを測る。壁はゆるやかに傾斜して底部に移行し、底部中央がわずかに窪んでいる。きわめて浅いこともある、埋土は茶褐色土の一層だけしか残っていない。遺物は須恵器4点、土師器17点で、いずれも細片となっている。このため須恵器2点と土師器1点しか図化できなかつた。

遺 物

須恵器 S-06は無高台杯の底部で、全体の1/6の小破片であるが、底径8.0cmに復元できる。体部は内面にわずかに湾曲してのび、立ち上がり外面はにぶい稜をしている。胎土に極小の砂粒を含み、焼成はよい。体部外面の調整は、強



25. SD-01 土壤実測図 (縮尺1/40)



26. 遺物実測図 (縮尺1/3)

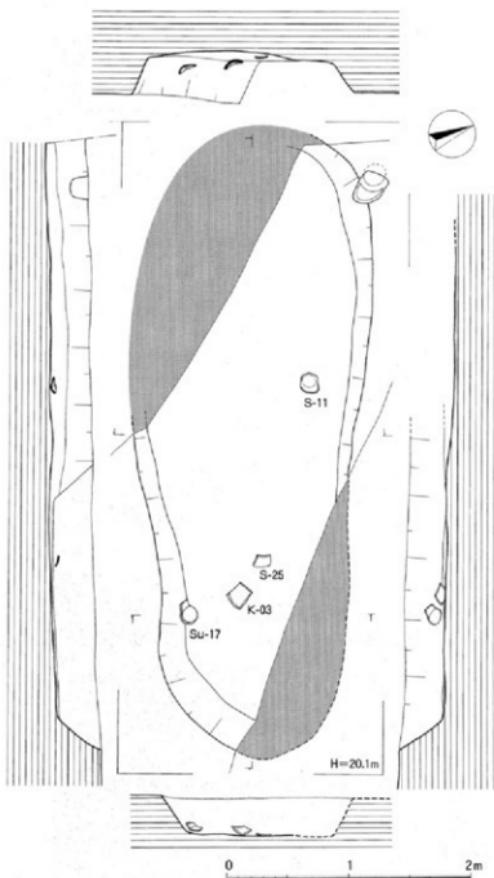
い横ナデでケズリ風になっている。ロクロ回転は逆時計回りである。

S-07は口径12.7cm、底径8.8cm、器高2.0cmの皿である。体部は直線的で、口縁端部はそのまま丸く作る。底部外面はナデ調整、立ち上がり外面は丸みがあり、斜めの条痕がついている。

土師器 H-04は底部がないが、特異な器形をした土師器である。円柱状の体部は、内側に強く屈曲し、端部を小さく摘み上げて口縁部としている。砂粒の少ない胎土だが精良という程ではない。焼成はよく、赤みを帯びた明茶色を呈している。



27. Ⅲ区の遺構



28. SD-02 土壌実測図（縮尺1/40）

SD-02土壤

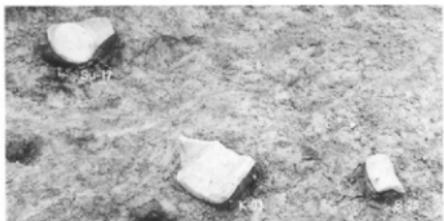
逆L字形をしている発掘区のⅠ区とⅢ区の屈曲部付近で検出した。試掘の際、竪穴住居跡と推定された落ち込みに当たる。

本調査で平面的に広げてみると、北西 - 南東方向にのびていることから、竪穴住居跡ではなく溝と考えられた。

しかしⅢ区でその延長部が現れると予想したが、残念ながら姿をつかめなかつた。北西端部は、おそらく壁の中で回っているのであろう。したがつて溝ではなく、長楕円形の土壌としたが、南東端部も試掘トレーンに切られているので全形は不明。現存部で長さ5m、幅1.8mを測る。深さは35cm前後あり、断面逆台形の底部は、ほぼ平坦をなす。

土層の実測をしていないが、周壁に沿つて黒みを帯びた茶褐色土が堆積し、その上に茶褐色土が乗ついている。

須恵器、土師器、瓦などの遺物は、埋土の上下層に等しく分散して出土するが、写真のように底部近くで大きめの破片が出土している。本発掘区の遺構では、もっとも遺物の出土量が多く、破片総数は723点である。完形品はないが、図化するには十分な大きさの破片が多いのも特徴である。



29. 遺物の出土状況



30. I区の遺構



31. SD-02 土塙 南東より

遺物

須恵器 益3、無高台杯5、有高台杯6、皿3、羹1の計18点を図示する。

S-08は杯蓋で、平坦な天井部に高さ6mm、径1.2cmの小振りな突起がつく。胎土は微小な砂粒を含み、焼成はよい。天井部に条痕が1本認められるが、不明瞭で、かつ破片のためにヘラ記号と断定できない。

S-09は1/8足らずの小破片であるが、口径16.6cmに復元できた。天井部は平坦で、そのまま口縁部をおさめているので、器高は0.8cmしかない。端部断面は方形に近く、上下に小さく張り出している。破片ながらシャープな作りをなしている。

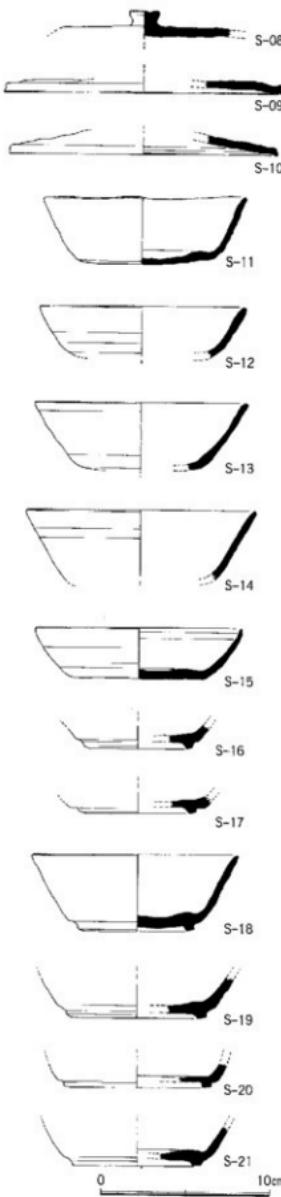
S-10の口径は16cm、口縁端部はハ字形に傾き、天井部はやや膨らんでいる。外面は横ナデの後にナデを加えているが、内面は横ナデのままで、凹凸が目立つ。

S-11は無高台杯で、口径12.4cmに復元したが、焼成時に変形して口縁部はゆがんでいる。体部もロクロ成形時の凹凸がそのまま残り、粗雑な仕上げとなっている。

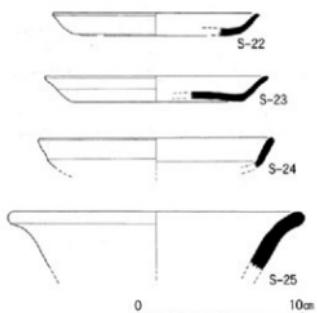
S-12~14は底部を欠いているので、高台の有無は分からぬが、ここでは無高台杯とした。それぞれに体部、口縁部の形状が異なる。S-12は底部からわずかに内湾しながらのび、そのまま丸い口縁部となる。S-13は体部の内湾は同じだが口縁端部で小さく外湾している。S-14の体部から口縁部まで直線的にのびている。3点とも砂粒の少ない胎土を用い、焼成もよい。

S-15は全体の半分以上が残る。口径12.4cm。体部は内湾気味にのび、端部で小さく立つて丸細の口縁部となっている。

S-16~21の6点は有高台杯。完形品が少ないので全体の器形を比較することはできないが、それぞれ高台の張りつけ位置、高台の断面形が微妙に異なる。S-16~18の高台は、断面台形で体部との屈曲部のやや内側にハ字状に張りつけている。S-19の高台は同じように外傾しているが、背が低く縁部を面取りしている。S-20の高



32. 遺物実測図（縮尺1/3）



33. 遺物実測図（縮尺1/3）



34. 須恵器質 (Su-08)

台断面は方形に近く、張りつけ位置も内側に寄つて、明瞭な屈曲部をしている。S-21の高台は偏平で、下端は水平でなく内傾している。

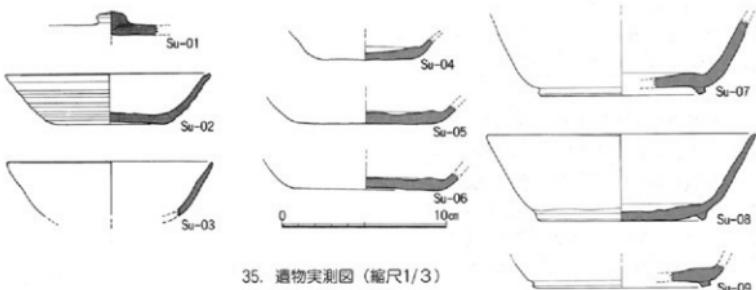
S-22～24は口径12.6～14.4cmの皿。いずれも小破片のために口径、傾きとも不正確である。S-22の口縁部は、小さく外反している。S-25は口径18.2cmの甕。外面は黒色であるが内面は灰を被り灰色を呈する。

須恵器質 Su-01～09は須恵器と同じ器形、調整でありながら、軟質でうすい灰色をしている。おそらく焼成温度が上昇しなかつたためと思われるが、窯跡ではなく集落遺跡から出土するということは、製品として流通し実際に生活道具として使用されたことを示しており、失敗作として無視できない。南八幡遺跡群に広がる奈良時代集落の性格究明の上でも重要と考え、須恵器と区別した。

Su-01は杯蓋天井部の小破片。断面でつまみの差し込みがよく分かる。

Su-02～06は無高台杯。Su-02は口径12.6cm。口縁断面は細丸に作り、体部には横ナテ痕が微妙の凹凸として残る。底部はナテを加えている。

Su-07～09是有高台杯。Su-07の高台は体部との境よりやや内側に張りつけている。高台径10.6cm。Su-09の高台は断面台形ではなく、丸みがある。口径16.6cm。また高台内底部が重りて、高台の用をなしていない。Su-09の高台は断面台形で、体部との境は明瞭に屈曲している。



35. 遺物実測図（縮尺1/3）

土師器 SD-02土壤の出土遺物の中でもっとも多いのは土師器で、計26点を図示した。H-05と06は蓋。H-05の胎土は砂粒が少なく精良土に近い。口径16.2cm。口縁端部内側に1条の浅い沈線が巡る。H-06の口径は23.8cmもあり、大型皿の蓋か。

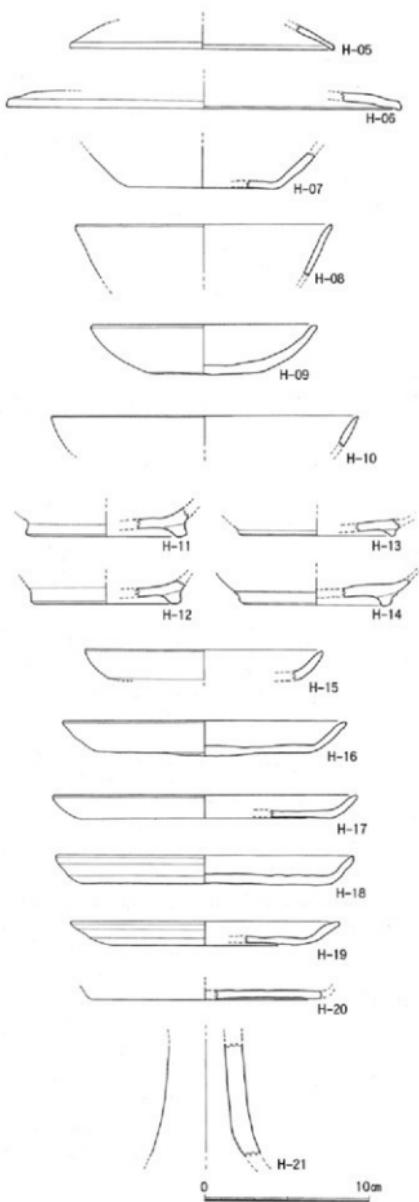
H-07～10は無高台杯。H-07は口径15.6cm、直線的な体部にそのまま口縁部を作る。H-08は底径9.0cmで、体部への傾きは弱い。H-09は底部と体部の境が丸みがあり、体部も湾曲してのびている。口径13.8cm。H-10は小破片だが口径18.8cmに復元した。傾きから杯とした。表面は磨耗して調整痕は不明。

H-11～14は有高台杯。4点とも底部の破片である。どれも体部との境に張りついているが、高台の作りが微妙に異なっている。H-11の高台径は10.0cm。断面は須恵器有高台杯と同じように台形であるが、いつそう大きい。精良土が用いられ、明茶色を呈する。H-12の高台は磨耗して丸みがあるが、本来はH-11と同じ形状だったのだろう。H-13と14の高台は八字形に開かない。H-13は小さく、背も低い。H-14は張りつけ後の横ナデで粘土が2段になつている。高台径9.4cm。胎土は精良。

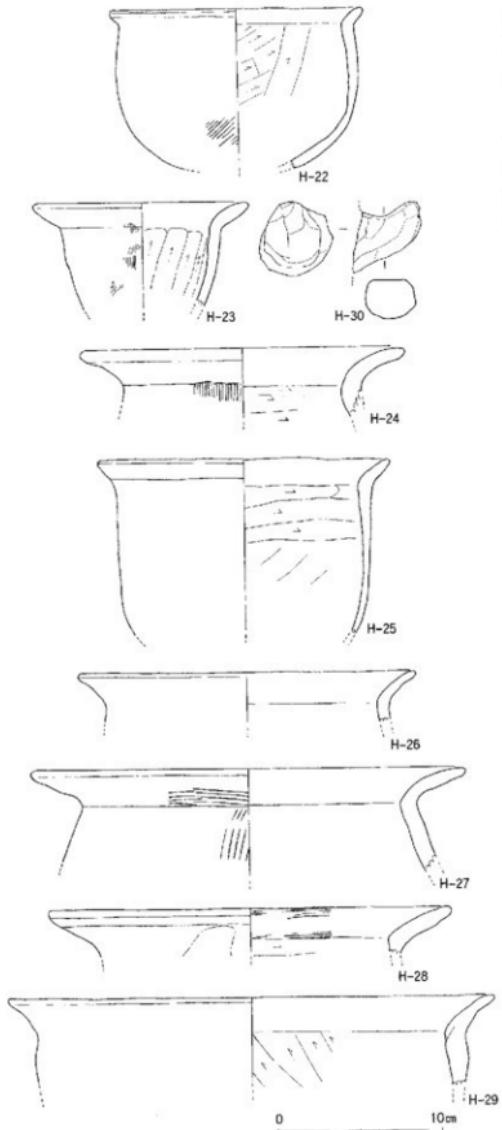
H-15～20の6点は口径14.6～18.6cmの皿。H-15はもっとも小型である。器壁も厚めで、体部の傾きは強い。H-16は成形時の凹凸が残り、底部は平坦ではなく中央が出ている。H-17は逆時計回りのロクロ回転。全体に丁寧な横ナデ



36. 土師器 (H-06)



37. 遺物実測図 (縮尺1/3)



38. 遺物実測図 (縮尺1/3)

調整が施されている。H-18の口縁端部は、わずかに内側に傾き、底部はヘラケズリ風の調整。H-19の体部はもっとも外反が強く、口縁部もさらに開いている。H-20は底部のみであるが、ヘラ切りの痕跡がよく見られたので岡化した。胎土、焼成とも良好である。H-21は高杯の脚部。精良土の胎土は焼成もよく明茶色をなす。器面の調整は柱状部内面は継ナデ、裾部内面は横ナデ、外面は横ナデで8mm幅の凹凸となる。

H-22～29はく字形に外反する口縁部の型で、口径が21cmを境に小型のH-22～26、大型のH-27～29の2種がある。

H-22は体部の張り、頸部の継まりとも弱く、口縁部は小さく外反している。体部内面の上半は右斜め上がりのケズリで砂粒が露出している。H-23は口径13.2cmと小さい。体部にふくらみではなく、尖り気味の底部となるのであろう。外面の調整はハケ目の後にナデ消している。H-24は口縁部へ大きく湾曲しているので、内面の後は鈍い。内面のケズリは右横方向。H-25は体部は丸底から真上にのび、外反する口縁部がつく。内面のケズリは下半が右上がりり、上半は右横方向である。口径18.0cm。胎土に砂粒が多く、成形、調整とも粗雑である。H-26の体部内面はケズリではなく横ナデ。口径20.8cm、精良土を用い、焼成も良好である。H-27は体部のほとんどを欠いているが、頸部の継まりからするともっとも張りがある。外反して口縁部は長くのび、丸い端部で終わる。外面の調整は、口縁部が横方向の粗いハケ目。体部は同じ工具で縦方向に施している。砂粒多いが、堅い焼成となっている。H-28の口縁部は直線的で、丁寧な横ナデ調整である。屈曲部内面の棱はシャープである。H-29は口径29.6cmの大型。厚みのある体部に比べ、口縁部は先細りとなる。体部内面のケズリは左上がりりで、本遺跡では特異である。H-30は把手。長さ3.7cmと小さい。全面に指による成形痕が残る。

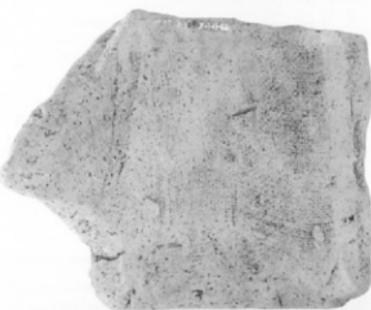
瓦類 2次調査では第1号竪穴住居跡の覆土より2点の瓦片が出土している。今回、SE-01井戸とSD-02土塙から計10点が出土し、すべてを図化した。数量も少なく、しかも小破片であることから、瓦葺き建物を直ちに想定することはできないが、南八幡遺跡群では初の発見となつた円面覗ととも奈良時代の様相を示す遺物として注目される。

K-03～07は丸瓦、K-08・09は平瓦である。K-03は写真のように底面直上で出土した。破片のために玉縁の有無は確かめようがないが、図の下端は元の形をとどめていることから広端側とした。ただ側縁との角度は直角に近いことから行基式ではないだろう。胴部のカーブから直径16cmの大きさと復元できる。側面には一部粘土を残し、平坦ではない。模骨からの分割、切離し法を知る手掛かりになろう。胴部凸面は繩目文叩きがわずかに認められるが、内面は布目圧痕がよく残っている。布目は平織りで1cm当たり経11本、緯10本である。2～3mm大の砂粒を含み、内外面とも茶色を呈する。

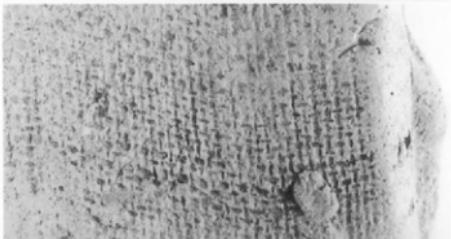
K-04と05は丸瓦側面部の破片。どちらも灰白色、軟質のために表面の磨耗が進んでいるが、外面に繩目文叩き、内面に布目圧痕がわずかに残る。K-06の断面はいびつなカーブだが丸瓦とした。図の上方側が斜めに削り落とされており、短端側であろう。凸面の叩き調整は磨耗のために不明。凹面の布目には布の合わせ目のような圧痕がある。K-07は3cm角の小破片。胎土は砂粒が少なく、淡い黄白色を呈する。断面の厚さは2.2cm、凹面に布目圧痕がある。経糸と緯糸は直交していない。

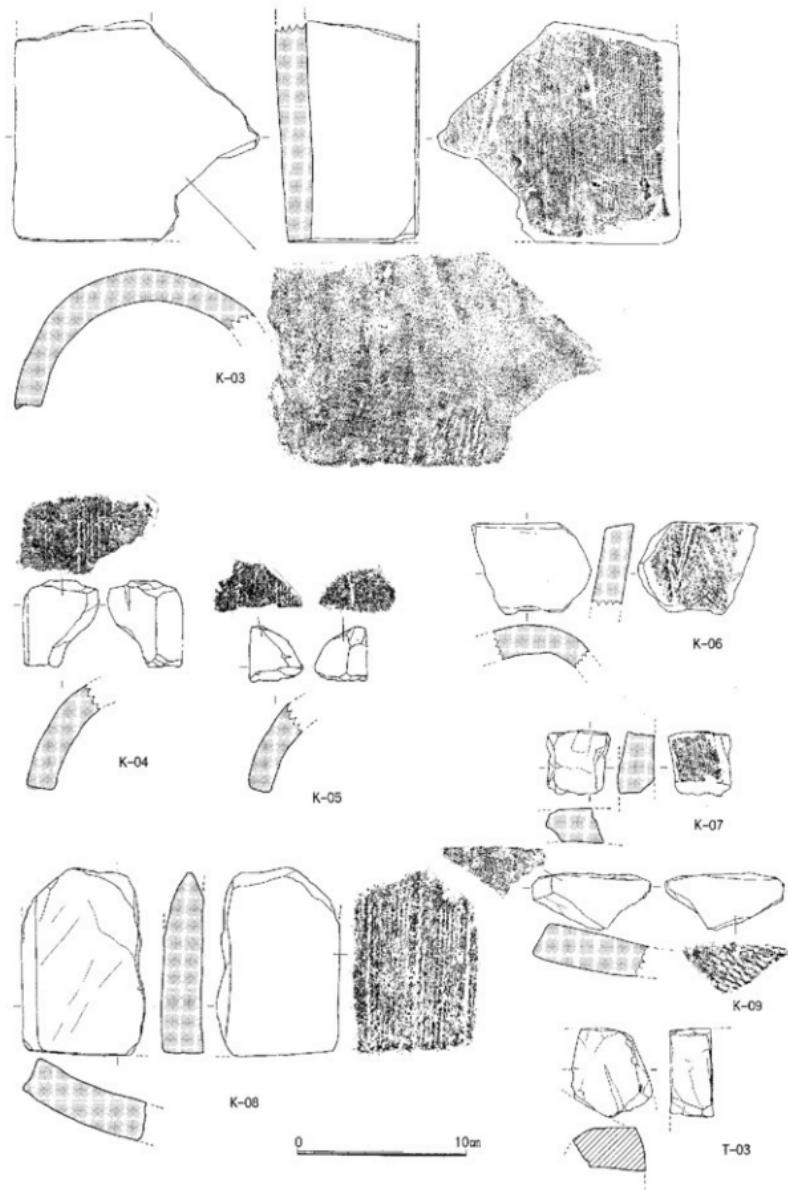
K-08は図の下方を平瓦の狭端側とした。側縁と角度は93度である。1mm大の砂粒を多く含み、軟質で灰白色となつている。凹面は斜めのナデ、凸面の叩きは平行繩目文となつていて。K-09はわずかに側縁をとどめる。やや軟質であるが焼成はよい。凸面の繩目文叩きはK-08に比べ粗い。

石器 T-03は砂岩質の石材を用いた砥石。図裏面は割れているが、3面を研ぎ面に使用している。



K-03





40. 遺物実測図 (縮尺1/3)

ピット出土の遺物

先に記したように67個のピットのうち18個のピットから何らかの遺物が出土した。これらは遺構の時期や性格を検討する上できわめて重要なことから、細片でも実測を試みた。口径、傾きなど多少正確さに欠けているのはこのためである。

S-26、27とH-31の3点は、Ⅲ区の遺構検出作業中に取り上げた破片。S-26とS-27は須恵器の有高台杯で、高台の断面と張りつけ位置が異なる。H-31は口径29cmの土師器甌。口縁端部は細丸で、3~4mm大の砂粒を含む。

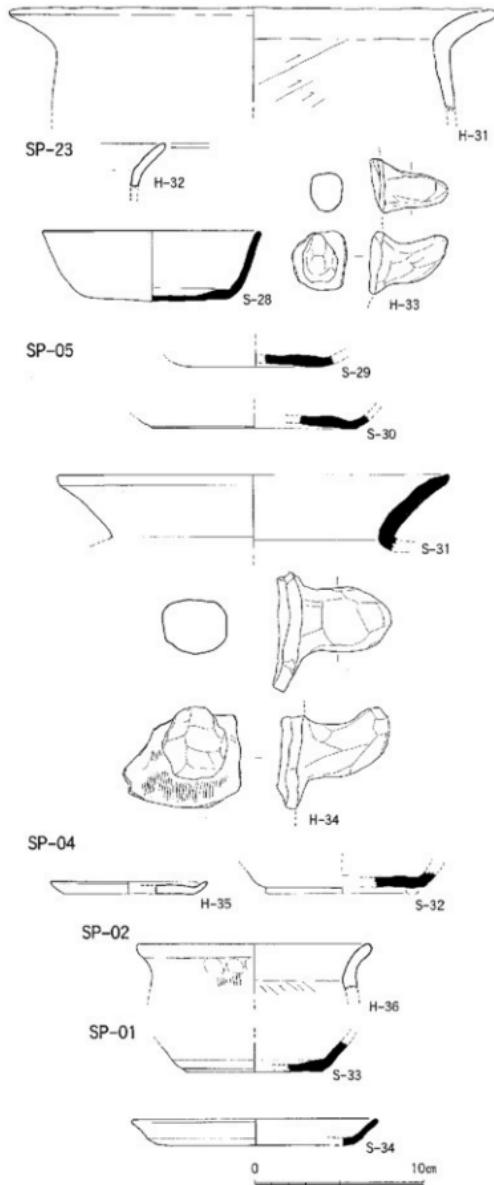
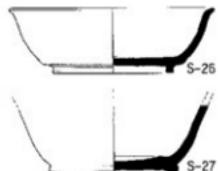
H-32,33とS-28はSP-23ピットから出土した。H-32は土師器甌の小破片。全体が磨耗して薄くなっている。H-33は把手。小型であることから甌の把手ではなかろう。S-28は無高台杯。口径13cm×13.8cmといびつである。

S-29~31とH-34はSP-05ピットから出土した。S-28, 29は無高台杯の底部破片。底径は異なるが同じように底部中央が凹み、ナデ調整している。S-31は口径30.4cmの甌。口縁部内面は灰を被っている。口縁端部が微妙に凹んでいる。H-34は大型であることから甌の把手であろう。甌体部との接合部に粗いハケ目を施している。茶色を呈し、胎上に砂粒多い。

H-35とS-32はSP-04ピットからの出土。H-35は口径5.4cmの土師器小皿。底部は切り離し後にナデ調整。小さく摘み上げて口縁部を作る。S-32は須恵器で高台の痕跡が残る。

H-36は土師器の小型甌口縁部、SP-02ピットから出土。頭部外面に指圧痕が横に並ぶ。S-33, 34はSP-01ピットから出土した須恵器無高台杯と皿である。

検出面



41. 遺物実測図（縮尺1/3）

遺物法量と登録番号対照表

件名	品名	器種	番号	口径	底径	高さ	登錄番号	件名	品名	器種	番号	口径	底径	高さ	登錄番号
14 18 SE-01 須恵器	S-01	杯蓋	S-01	17.0	23		01074	24 37 SD-02 土師器	H-09	無高台杯	H-09	18.8			01081
	S-02	盤	S-02	24.4			01075		H-10	無高台杯	H-10				01081
	S-03	盤	S-03				01073		H-11	有高台杯	H-11	10.0			01072
	S-04	?	S-04	10.8			01072		H-12	有高台杯	H-12	9.2			01073
	S-05	円面鏡	S-05	8.0			01067		H-13	有高台杯	H-13	9.6			01071
	S-06	円面鏡	S-06				01067		H-14	有高台杯	H-14				01068
15 21 SE-01 上向齿	H-01	盤	H-01	25.4			01011		H-15	皿	H-15	14.6			01048
	H-02	把手	H-02				01014		H-16	皿	H-16	17.4			01049
	H-03	高杯	H-03				01015		H-17	皿	H-17	18.6			01041
	K-01	丸瓦	K-01				01110		H-18	皿	H-18	18.2			01043
	K-02	丸瓦	K-02				01102		H-19	皿	H-19	16.6			01044
	T-01	磁石	T-01				01269		H-20	皿	H-20				01089
19 26 SD-01 須恵器	S-06	無高台杯	S-06	8.0			01055	25 38 SD-02 土師器	H-21	高杯	H-21				01010
	S-07	皿	S-07	12.7	0.5	20	01056		H-22	甕	H-22	15.6			01002
	H-04	?	H-04	5.8			01054		H-23	甕	H-23	13.2			01052
	S-08	杯蓋	S-08				01026		H-24	甕	H-24	20.0			01005
	S-09	杯蓋	S-09	16.5			01027		H-25	甕	H-25	18.0			01001
	S-10	杯蓋	S-10	16.0			01028		H-26	甕	H-26	21.0			01068
22 32 SD-02 須恵器	S-11	無高台杯	S-11	12.4	8.1	40	01019		H-27	甕	H-27	26.6			01069
	S-12	無高台杯	S-12	12.4			01022		H-28	甕	H-28	24.6			01097
	S-13	無高台杯	S-13	12.8			01024		H-29	甕	H-29	23.6			01004
	S-14	無高台杯	S-14	13.6			01023		H-30	把手	H-30				01069
	S-15	無高台杯	S-15	12.4	7.8	3.1	01021		K-03	丸瓦	K-03				01101
	S-16	有高台杯	S-16		6.6		01078		K-04	丸瓦	K-04				01105
	S-17	有高台杯	S-17			7.2	01077		K-05	丸瓦	K-05				01104
	S-18	有高台杯	S-18	12.3	7.0	4.6	01020		K-06	丸瓦	K-06				01107
	S-19	有高台杯	S-19		8.4		01031		K-07	丸瓦	K-07				01106
	S-20	有高台杯	S-20		8.8		01018		K-08	平瓦	K-08				01103
	S-21	有高台杯	S-21		7.4		01020		K-09	平瓦	K-09				01109
	S-22	皿	S-22	12.6	9.0	14	01076		I-03	磁石	I-03				01201
	S-23	皿	S-23	13.8	10.3	16	01025		I-04	丸瓦	I-04				01105
	S-24	皿	S-24		14.4		01040		I-05	丸瓦	I-05				01104
	S-25	甕	S-25	18.2			01079		I-06	丸瓦	I-06				01107
23 33 SD-02 須恵器	Su-01	杯蓋	Su-01				01038		I-07	丸瓦	I-07				01106
	Su-02	無高台杯	Su-02	12.6	6.7	3.2	01032		I-08	有高台杯	I-08	10.2	7.4	3.9	01016
	Su-03	無高台杯	Su-03	12.6			01035		I-09	有高台杯	I-09		7.8		01017
	Su-04	無高台杯	Su-04		5.5		01034		H-31	甕	H-31		29.0		01003
	Su-05	無高台杯	Su-05	8.0			01033		SP-23	土師器	H-32	甕			01065
	Su-06	無高台杯	Su-06	9.0			01037		SP-24	土師器	H-33	把手			01064
	Su-07	有高台杯	Su-07				01029		SP-25	土師器	H-34	把手			01063
	Su-08	有高台杯	Su-08	16.6	10.4	5.4	01066		SP-26	土師器	H-35	小皿	9.4	4.2	01061
	Su-09	有高台杯	Su-09		10.9		01039		SP-27	土師器	H-36	甕	13.8	8.4	01062
	Su-10	有高台杯	Su-10				01040		SP-28	土師器	H-37	甕	12.0		01060
24 37 SD-02 土師器	H-05	杯蓋	H-05	16.2			01047		SP-29	土師器	H-38	甕	23.4		01058
	H-06	杯蓋	H-06	23.8			01046		SP-30	土師器	H-39	把手	9.4	7.8	01055
	H-07	無高台杯	H-07		9.0		01074		SP-31	土師器	H-40	甕	9.0		01057
	H-08	無高台杯	H-08	13.8			01045		SP-32	土師器	H-41	甕	8.2		01050
	H-09	無高台杯	H-09				01045		SP-33	土師器	H-42	甕	14.6	11.6	1.6

※記載の登録番号の前に製造番号の末尾70を加えると奈良市歴史文化財センターで検索できます。

第3章 小 結

井戸、掘立柱建物跡、土壙、ピットの各遺構と遺物について記してきたが、これらの遺構は出土遺物から奈良時代8世紀代に営まれたものであることがわかる。発掘面積が限られていたこともあって、検出した遺構、遺物量はけつして多くはないが、井戸や円面窓のように南八幡遺跡群としては初めての知見となったものも含まれており、奈良時代集落の範囲把握とその性格究明という所期の発掘目的は達成できたと思われる。ここでは周辺遺跡の調査成果と合わせて、残された問題点をあげてまとめとする。

奈良時代における南八幡遺跡群の地形は、7次に及ぶこれまでの発掘調査によってある程度推測が可能となってきており、挿図4の分布図を大きく修正する必要はない。また、本年度、J R 南福岡駅構内で行われた最新の発掘でも、分布図のよう南側の雑餉隈遺跡群と画する小さな谷が入り込んでいることが確認されている。また東側の麦野遺跡群とも地形的には、区別できそうであるが、この周辺は福岡市内でも最も奈良時代の遺構が密集している場所であることが明らかになり、あらためて各遺跡群ごとの集落変遷や関連づけなどの検討が必要になつてきている。

南八幡、麦野、雑餉隈遺跡群の7世紀末から8世紀代の主な遺構を合計すると、堅穴住居跡146軒、土壙56基、井戸7基、掘立柱建物跡は時期判断が難しいのも含めると39棟を数える。もちろんこれらの遺構は同時期に営まれたものではない。南八幡遺跡群2、3次では、奈良時代8世紀中頃から後半にかけての堅穴住居跡が計11軒検出されているが、出土遺物やカマド位置から少なくとも2度の建てかえが推測されている。耐久性のない木造堅穴住居からしても妥当と思われるが、未掘部の堅穴住居跡数を加えると、一大集落の景観が容易に想像できる。

雑餉隈遺跡群9次調査では、7世紀末～8世紀初頭にかけての大型掘立柱建物群が検出され、その規模や配置などから官衙的な施設と推測されている。今回出土した円面窓や瓦類などは、その推測を裏付ける有力な遺物はあるが、数量的にも質的にも奈良時代の華やかなイメージとはほど遠い。100軒を超過する堅穴住居跡からなる集落でありながら、かまどはあっても食器以外の遺物はほとんどなく、生活感が乏しい。国際外交が繰り広げられていた太宰府や鴻臚館とは比較しようもないが、あまりにも貧しく、山上憶良の『貧窮問答歌』を彷彿とさせる。周辺に生産基盤であった水田がなかったわけではない。弥生時代奴国を中心地域として、早くから低地の水田化は進んでいたはずである。しかし、9世紀になると堅穴住居跡はほとんど姿を消してしまう。このような事から、太宰府や水城などの国家的施設の建設や修理などを従事させるために集住させたという推測も頷けよう。生産活動を基盤とする集落でなかつたために、衣食に関する遺物が少なく、国家的な政治の動きとともに、集落の発展も終わつたのであろうか。まだまだ解明すべき問題点は多い。



42. 完成したビル

南八幡遺跡群

第8次調査
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第602集
1999年(平成11年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話 092-711-4667

印刷 九州印刷株式会社
福岡市博多区西月隈3丁目11番27号
電話 092-476-3666

南八幡遺跡群

第8次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第602集

1999年

福岡市教育委員会